Osaka Shoin Women's University Repository.

紫式部集の歌と詞書

竹内　美千代

一

物語作家として偉大な紫式部も、歌人としては高く評価されているとはいえない。源氏物語の作者として当時盛名を馳せていたことは、紫式部日記にも明らかである。しかし歌合には彼女の歌は見えないし、在世中に撰進された拾遺集にも、和泉式部や赤染衛門は入集しているが、紫式部の歌は取られていない。始めて勅撰集に入つたのは、一〇八六年に成つた後拾遺集であるから、紫式部の推定没年を一〇一四年頃とすると、没後六、七十年経ているわけである。栄華物語には5首、勅撰集では千載集に9首、新古今集に13首が最高で、以下新千載集まで56首入れられている。従つて今日から見れば一応歌人としての地位も保つているわけである。

紫式部の没後、源氏物語の価値が高く認められるにつれて、その詠歌をも尊重されて来たわけである。彼女は当時の教養ある女性として、和歌には大きな関心と努力を払い、歌集や髄脳などもよんで、確乎とした和歌観を有していたと思われる。日常の和歌の贈答にも不自由なく口疾く応酬し、代作や献詠も行つている。中宮出仕も源氏物語作者の才能を認められたのは勿論であるが、歌才でも水準以上のものとして自他共に許していたであろうことは、日記や源氏物語にもうかがい得られるのである。歌人として令名を謳われた和泉式部や赤染衛門にも、決してひけを取らない自負を持つていた。それは単に競争意識や負けじ魂からばかりでなく、当時一般の和歌観としては穏健妥当な考えであつたと思われる。和泉式部は歌の天才として時流を擢んでた異色ある歌人であり、紫

Osaka Shoin Women's University Repository

式部は時代の和歌意識を学びとつた尋常な努力型の歌人であつて、彼女の天才は物語創作にあつたといえよう。

紫式部の作品として今日見られるものは、申すまでもなく源氏物語と、紫式部日記と、紫式部家集とであつて、その文学的価値も、研究の進んでいる程度も、この順序である。紫式部集は彼女の伝記研究の資料として、次才に光を当てられて来たが、家集そのものの文学的研究は、充分な成果が発表されていない。私は紫式部の歌と文章との関係を探つてみたいと思つて紫式部集を読んで来た。

最近に今井源衛氏の「源氏物語と紫式部集」（国語と国文学　42・6）南波浩氏の「千載集紫式部歌の詞書をめぐる問題」（国語と国文学　42・5）「定家本紫式部集についての一考察—瑞光寺本紫式部集による—」（国語国文42・5）等相次いで発表され恩恵をいただいた。私はそれらとの重複をさけて小論を進めたいと思う。

二

紫式部の和歌を考えるには、才一に紫式部家集がある。次で日記の中に詠まれた歌。勅撰集・私撰集に採られた歌。他の物語や他の家集に見えるものを集めれば、かなり多い。そのうち重複した歌を除き、家集中の他人の歌を省き、彼女の自作歌のみをより出すと、99首集めることができる。また同一視することは出来ないにしても、源氏物語中に詠み入れられている794首も対象にすべきものである。平安女流歌人の現存歌数としては、和泉式部約1500首、赤染衛門約600首、伊勢大輔約150首、相模約650首（集中の他人の歌も含む）と比べてみても、和泉式部に次で多いわけで、紫式部の和歌に対する自負と力量が思われるわけである。

紫式部家集の諸本については先学の方々の精緻な御研究があるが、池田亀鑑博士は三類に分けていられる。

一類　定家自筆本系統（119首）——流布本系統（群書類従本）

二類　古本系統（114首）——異本系統（桂宮本）

三類　雑纂本系統（120首）

Osaka Shoin Women's University Repository

三類本は歌数・歌序が一類本に近似し、本文に異同がある。一類本に「いづくとも身をやる方の知られねば憂しと見つつもながらふるかな」の1首を加えたものといつていられる。従つて本稿では一類と二類を見れば足りるわけである。また刊本には一類本系統の校合本である群書類従本があり、二類本は桂宮本があるので、この両者を用いた。一類本では書陵部蔵の谷森本（351・381）と三条西本（464・28）を、二類本では御所本（特・47）（501・730）を拝見した。流布本系統に類聚本を用いての研究は、岡一男博士、[注2]今井源衛氏[注3]も発表されているので、歌順番号が一致し好都合なので、本稿でも群書類従本によつて、歌順を1から123までつけた。

紫式部の自作歌と見なされるものを、源氏物語の歌を別にして数えると99首あるがそのうちわけは左の通りである。

A　紫式部家集（94首）

1　流布本（類従本）123首中他人の歌37首を省くと、作者の歌は86首ある。

2　異本（桂宮本）131首中、類聚本にない歌は10首。うち他人の歌2首。作者の歌は8首である。

B　紫式部日記

日記中に18首の歌があり、うち他人の歌7首。紫式部の歌は11首。但しこれは家集の類従本と桂宮本に全部収められている。

C　其の他（5首）

1　伊勢大輔家集にのみ見える歌。2首。

2　栄華物語に見える歌5首。うち3首は家集に入つているので、栄華物語にのみ見える歌は2首。

3　勅撰集に採られた和歌は59首あるが、岡一男博士の御研究によると、誤りや源氏物語中の歌がありなどして、自作歌は56首となり、うち55首は家集中にあり、勅撰集にのみ見られるものは、新千載集　恋五「かき絶えて」の歌1首だけとなる。

Osaka Shoin Women's University Repository

99首の自作歌を左に記す。但し類聚本は歌順番号を示すこととする。

A
1　類聚本　86首

102	70	36	1
103	72	38	2
106	73	39	3
107	75	41	4
109	76	42	7
110	77	43	9
111	78	44	11
113	79	46	13
114	81	47	14
116	83	48	15
117	84	50	18
120	85	51	20
121	88	52	21
122	89	53	22
	91	54	23
	92	55	24
	93	56	25
	94	58	27
	95	59	28
	96	61	29
	98	62	30
	99	63	31
	100	65	32
	101	68	34

2　桂宮本のみにある歌　8首

① をりからをひとへにめづる花の色はうすきを見つつうすきともみず
② 閉ぢたりし岩間の氷うちとけばをだえの水も影みえじやは
④ み吉野は春のけしきに霞めども結ぼほれたる雪の下草
⑤ いづくとも身をやるかたの知られねば憂しと見つつもながらふるかな
⑥ 水鳥を水のうへとやよそにみん我もうきたるよをすぐしつつ
⑦ 年くれて我よふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな
⑨ 人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとはくちならしけん
⑩ よのなかをなになげかまし山桜花みるほどの心なりせば

C
1　伊勢大輔家集にのみ見える歌　2首

(1) 心ざし君にかかぐるともしびのおなじ光にあふがうれしさ
(2) おく山の松葉に氷る雪よりも我身世にふるほどぞはかなき

2　栄華物語にのみ見える歌　2首

(1) ありし世は夢に見なして涙さへとまらぬ宿ぞ悲しかりける　（岩蔭）
(2) 雲の上を雲のよそにて思ひやる月は変らず天の下にて　（日蔭のかづら）

Osaka Shoin Women's University Repository

3　新千載集にのみ見える歌　1首

1548　かき絶えて人も梢の歎きこそ果はあはでの杜となりけれ　（巻十五　恋五）

備　考

岡博士は『源氏物語の基礎的研究』に新資料として、平兼盛集の巻末に添加されている伏名歌集を挙げられた。その12首の歌のうち 9 10 11 12 の歌が紫式部の娘に関係の深い歌であり、10の歌が紫式部の歌と考えるならば更に1首加えることになる。国歌大系兼盛集の補遺として収められている。

同じ宮の藤式部、親の田舎なりけるに、いかになど書きたりける文を、式部の君なくなりて、そのむすめ見侍りて、物思ひ侍りける頃、見て書きつ、

9　憂き事のまさるこの世を見じとてや空の雲とも人のなりけむ

まづかう〳〵侍りけることをあやしく、かの許に侍りける式部の君の

●10　雪つもる年にそへても頼むかな君をしらねの松にそへつつ

三

以上99首について歌風を考察していこう。紫式部集の歌の配列は既に先学者が述べていられる通り、大きい流れは年代順になつている。大まかにいつて未婚の時代、結婚の時代、寡居の時代、宮仕の時代と並べられている。時にそれを破つて序列を乱したものが見られる。

多感な娘時代は、交友の歌や父為時の任地越前への旅の歌など、新鮮で情感の豊かな詠作がある。結婚時代は、婚前から結婚生活中の、宣孝との生彩ある恋の贈答歌があり、寡居の哀傷歌、物語絵の歌、身の不幸を歎く歌があり、55番まで歌集の半ばに達している。56番からは宮仕生活を詠じている。彼女の生活を一変させた中宮出仕により、公的な贈答や儀礼的な歌を作る機会も多く、折にふれての述懐の歌など深刻な暗い歌が多い。後半に変化を与えるためか、宮仕以後に結婚生活中の詠と思われる恋歌や、越前からの帰途の旅の歌などが入つてい

Osaka Shoin Women's University Repository

る。それは歌集編纂の際の意識的な変位と思われ、流布本でいえば例えば、17 18の間、47 48の間、51 52の間、75 76の間などのように、伝来の間の序列の乱れや誤脱の箇所もあり、現存の家集は編纂時の形態を保つては居ない。歌集を内容によって分類して表示しよう。

		類従本	桂宮本その他
贈答	23	3(ト) 4(ゾ) 7(ト) 9(ト) 11(ゾ) 15(ゾ) 18(ト) 61(ト) 68(ト) 70(ト) 73(ゾ) 98(ト) 99(ゾ) 103(ト) 106(ト) 113(ト) 114(ゾ) 120(ト)	18	②(ゾ) ④(ゾ) ⑨(ト) 伊(1)(ゾ) (2)(ゾ)	5
述懐	21	1 2 14 52(ゾ) 53 54 55 56 58 59 65 94 95 102 116 117	16	① ⑤ ⑥ ⑦ ⑩	5
自然	4	13 36 38 100	4		
恋	19	29(ト) 31(ト) 32(ゾ) 34(ト) 50(ト) 51(ト) 72(ト) 75(ゾ) 76(ト) 81(ト) 88(ト) 89(ト) 91 92 93(ト) 107(ゾ) 109(ト) 110(ト)	18	新千載 1548(国歌大観番号)	1
旅	11	20 21 22 23 24 25 27 28 77 78 79	11		
儀礼	8	62 63 83(ゾ) 84 85(ゾ) 96(ゾ) 101(ゾ) 111(ゾ)	8		
うた絵	3	30(ト) 44(ゾ) 46 47	4		
哀傷	9	39 41(ト) 42(ゾ) 43(ト) 48 121(ゾ) 122(ゾ)	7	栄(1)(ゾ) (2)(ゾ)	2
総計	99		86		13

Osaka Shoin Women's University Repository

贈答歌。表に贈答歌は23首あるが、其の他所懐1　恋15　儀礼5　歌絵2　哀傷7が贈答歌であるから計53首で、総歌数の半数以上を占めている。これは彼女の詠歌態度を示すものであるが、彼女に限つたことではない。和歌が社交の要具として日常生活に欠くべからざるものであつたことは当時の社会の風潮である。女子は才一の学問として古今を誦んじ、歌人の家集をよみ、贈答の歌の修練に励んだ。従つて他の女流歌人の家集を見ても、贈答歌の占める割合は大きい。

贈答歌は時、事情、相手等による制約があつて、折にふさわしく口疾く詠まねばならない。必ずしも感動を待つて詠むというわけでなく、機に応じて詠むので情感のほとばしる歌というよりも、達者に詠みこなす事が必要となる。宮仕に出て後は中宮方の女房として代作や献詠など公的な機会が多くなつた。道長から歌詠めと命ぜられて対等に応酬しているし、同僚との応答など自由にこなし歌人としての資格を備えていたわけである。源氏物語中の歌の大部分が贈答歌であることとも、考えあわせるべきである。家集には歌合の歌や屏風歌のないこと、題詠歌の少いことも見のがせない。赤染衛門や伊勢大輔に歌合せや屏風歌が見られるのは、彼女らが専門的歌人として遇されていたこと、その長寿が歌人として長く活躍させたことを物語るものである。紫式部は家集編纂後、久しからずして没したであろうことからして、そうした歌合せに召される折もなかつたのであろう。同じく贈答歌を多く詠んでも、赤染衛門は規定された枠の中で、精一ぱい感動を盛りこむことに努力し、和泉式部は題詠や贈答歌の中に実感をこめ、魂の燃焼さながらに詠みあげているのに比べ、紫式部の贈答歌には感動の乏しい憾みはあると思う。

恋の歌については、既に岡一男博士、今井源衛氏、中川浩文氏[注4]らの秀れた論考があるので重ねては述べない。恋の歌19首というのは少い。小野小町集、和泉式部集、小馬命婦集、赤染衛門集、相模集等、平安女流歌人の家集中、紫式部の恋の歌は最も少い。宣孝との恋の応酬は29から35までは明瞭であるが、後半の宮仕以後にある相手不明の恋歌も、宣孝とのものかと想像される81　89　91　92　107　109　110など、彼女の恋は宣孝とのものこそ唯一の生彩を放つものと思う。婚前や寡居の後にも、懸想文を寄せる者のあつたらしいことは想像されるが、

Osaka Shoin Women's University Repository

彼女が心を動かし恋情を育てていつたと思われるものはないように思う。宮仕する女房という身分柄、そうした機会は多かつた筈であるが、歌集からは考えられない。当時の男女関係に対する不信や批判は日記にも見られる。恋の種々相を物語の中に描き出した彼女は、その末のはかなさや、宿命というものまで見透していた。彼女自らは男女の情事には懐疑的で冷静、索漠とした孤独感が貫いているように思う。

しはすの廿九日にまいる。はじめてまいりしもこよひぞかしと思ひいづれば、こよなくたちなれにけるもうとましの身の程やと思ふ。夜いたくふけにけり。まへなる人々うちわたりはなほいと、けはひことなり。さとにては今はねなまし。さもいさときくつのしげさかなと、いろめかしくいふをきく。

⑦年くれて我よふけ行く風の音に心のうちのすさまじきかな　（桂宮本）

中宮還啓の行事果てて退出する上達部殿上人たちを見て、

こなたの陣のかたよりいづ。おのがじし、家路といそぐも、なにばかりの人にはと思ひおくらる。

（紫式部日記）

と、人の世の恋には背を向けた態度が見られる。自分のためでなく、小少将の君のためと弁解しているが、こうした荒寥たる心には恋の種は育たずして、恋愛歌を質量共に寂しいものにしたと思われるのである。

四

自然観を見るために、99首を分類してみた。歌の中に季節や自然物を全く詠み込んでいないものは13首。あとの86首は季節をあらわすか自然物を詠み入れている。春20　夏13　秋16　冬14　季の雑23と、どの季節も大体に万遍なく詠じている。春の歌には若い頃のものが多く、秋・冬の歌には寡居以後のものが多い。自然物は詠み込まれているが、季節の定まらぬものを雑とした23首中には、越前への往還の旅の歌7首がある。無季無景物の13首は、述懐5　恋3　哀傷3　賀1　歌絵1と自己をみつめる内省的なもので占められ、大部分が寡居後晩年のものである。

Osaka Shoin Women's University Repository

		類聚本		桂宮本その他	
季節を含む歌 63	20 春	14 三月一日祓へどの神 15 北へゆく雁 28 白ねの雪 32 薄ら氷 36 桃・桜 38 梨・桜 41 霞 43 散る花 46 梅の香 51 鶯の宿・霞 57 青柳の糸 98 霞 99 梅の花 100 八重桜 101 山桜 102 正月三日	16	① 花の色 ② 氷解く ④ 霞・下草 ⑩ 山桜	4
	13 夏	4 朝顔 13 ほととぎす 22 夕立 52 朝顔のつゆ 61 あやめ草 62 五月五日 68 あやめの根 70 くいな 72 くいな 76 ほととぎす 81 夏衣 92 とこ夏	12	⑨ 梅の実	1
	16 秋	1 月（七月十日） 2 虫・秋の別 3 露・虫のね 47 さを鹿・萩 73 女郎花・つゆ 83 もち月（九月） 84 月の影 89 月影（九月） 91 秋・月 93 花すゝき・つゆ 106 霧・秋 107 天の河 110 秋の月 111 菊のつゆ 116 秋の月 117 すまひ（七月）	16		
	14 冬	9 もみぢば 11 霜氷 25 雪 27 雪 42 をしの子 88 霜枯の浅茅 96 豊の宮人・ひかげ 103 摺れる衣（五節） 113 時雨 114 鴨・冴え 120 はつ雪	11	⑥ 水鳥 ⑦ 年くれて 伊(2) 松ばに氷る雪	3
自然物はあるが季節が定まらぬ歌	23 雑	7 月・雲の通ひ路 18 松浦・空 20 三尾の海・網ひく 21 磯・たづ 23 しほつ山 24 おいつ島・わらはべの浦 29 千鳥・野洲 30 海・塩やく 34 みはらの池・堤 39 雁 48 煙・塩がまの浦 50 岩・岸・あだ波 53 若竹 63 かがり火の影・池水 65 影・涙・滝の音 77 猿・たこの呼坂 78 白山・伊吹の嶽 79 苔むすそとば 94 かひぬまの池 95 仝上	20	栄(2) 雲・月 後拾遺1548 梢・あはでの杜 伊(1) ともし火	3
無季自然物のない歌	13	31 44 54 55 56 59 75 85 109 121 122	11	栄⑤(1)	2
総計	99		86		13

Osaka Shoin Women's University Repository

対象となつている自然物は表にも明らかなように、都での優美な生活を通して見る年中行事の景物や庭園の前栽など、人事と調和する背景的役割をつとめる自然である。これは彼女に限らず、平安朝の詩歌、文学に通じた特色である。長徳二年（996）と推定される父の為時と共に下つた任国越前への旅は、都から出る機会の少い深窓の女性に、広い視野と新鮮な印象を与えた貴い体験となつた。しかし都の生活を最上して、僻地になじめない都恋しさの念や、何らかの事情のため、家族に先立つて翌年[注5]の秋の終り頃には帰京したため、地方の風土や生活に対する秀れた詠作は乏しい。源氏物語にもそうしたものの投影は少ない。自然観照の深さ鋭さは、清少納言や菅原孝標女の方がまさつているように思う。

13　ほととぎすこゑ待つ程は片岡の杜のしづくに立ちや濡れまし

22　かきくもりゆふだつ浪のあらければ浮きたる舟ぞしづ心なき

28　春なれど白根のみ雪いやつもりとくべき程のいつとなきかな

など若い頃の旅の歌には、若々しい情感がおつとりと自然に流れて美しいものがある。

述懐の歌。この家集で最も特色のあるのは所懐の歌である。述懐の22首の他に贈答の120④　哀傷の121 122　栄華物語の2首　伊勢大輔集の(2)の7首をも併せ考えると、彼女の感懐がありありと伝わつてくる。それは日記の述懐の記述とも通じるものである。

夫宣孝の死を長保三年四月二十五日と、尊卑分脈には記してある。僅かな結婚生活で夫に急逝された紫式部は、真実世の無常に直面した。家集には 41 42 43 48 にその死を悼んでいる。生来内攻的で批判的思考的な紫式部にとつて、人生最大の不幸に遭遇した寡居の数年間は、貴重な思索の時期であつた。我身の薄幸を嘆くことから、世の人の幸不幸、人生の帰趨、宿命といつたものを、つきつめて思索した。父譲りの学問好きは、夫の遺した漢籍を耽読し、仏典をもひもとき人生観照を深めて行つた。そうした傷心の彼女のつれづれを慰めたのは、くさぐさの物語を読むことであり、また物語を創作することであつた。源氏物語はこうした中から生まれたのである。

Osaka Shoin Women's University Repository

52　消えぬ間の身をばしるしる朝顔の露とあらそふ世を歎くかな

53　若竹の生ひ行く末を祈るかな此の世をうしと思ふものから

54　数ならぬ心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり

55　心だにいかなる身にかかなふらん思ひしれども思ひしられず

「身を思はずなると歎くことのやうやうなのめに、ひたぶるのさまなるを思ひける」と54の詞書にあるが、無常厭世の観が歌にあらわれるのは夫の没後からである。老いた父や幼い賢子将来のことを考えて、道長の懇望に応え彰子中宮に出仕した。これは彼女の才二の人生の出発であつた。心細い里居から一躍して、才一の権勢と栄華に耀く後宮生活を体験したことは、源氏物語に生きた資料を提供した。しかしそうした華やかさにも紛れず、一そう身の憂さが感ぜられ、対人関係の煩わしさもあつて、宮仕を厭う心が去らない。わずかに慰められるものは、大納言・小少将など気の合つた同僚との友情であつた。

115　うち払う友なきころの寝覚めにはつがひしをしぞ夜はに恋しき

⑥　水鳥を水のうへとやよそにみん我もうきたるよをすぐしつつ

紫式部が心から親愛と同情の念を抱いていた薄幸の佳人小少将は、彼女に先立つて亡くなつた。

121　暮れぬ間の身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつは悲しき

122　誰れか世にながらへてみん書きとめし跡は消えせぬ形見なれども

⑤　いづくとも身をやるかたの知られねば憂しとみつつもながらふるかな

(2)　おく山の松葉に氷る雪よりも我身世にふるほどぞはかなき

憂愁はますます深いが、小少将への哀傷歌は家集の最後を閉じる役をつとめて居り、紫式部集はまもなくこの年の暮に編纂されたと思われる。岡博士は紫式部命終の時を、その翌年長和三年二月（一〇一四）と推定されている。

Osaka Shoin Women's University Repository

以上家集を主に、紫式部が自らの立場で詠んだ99首について考察した。これについで源氏物語の登場人物の立場から、老若男女様々な仮面をつけた紫式部の詠み口を見なければならないが、それはまたの折のこととしたい。

家集を通観するに、少女時代から晩年までの心の遍歴を偽らず誠実に詠じている。表現も洗練され調べも美しい。しかし情感の溢れ出るといつた歌でなく、思念をこめた暗い歌に秀れたものがある。また修辞上掛詞や縁語をかなり用いている。掛詞を用いた歌31首。縁語12首、（うち5首は掛詞と併用。）地名や物の名を詠み入れた歌11首。というように三代集に見られる形式的な修辞的努力もしているが、これは当時の歌風で彼女だけの特色ではない。彼女自身こうした言語遊戯的なものに高い価値を置いていないことは、末摘花の縁語や掛詞に煩わされた歌を笑い、「和歌の髄脳いと所狭う」と面倒がつた源氏の態度で明らかである。こうした言語遊戯的な修辞は、旅の歌や儀礼的な賀の歌や贈答歌などに見られ、彼女が真情を吐露した述懐の歌などには見られないのである。

五

次いで紫式部集の詞書の考察に移ろう。申すまでもなく詞書は、歌の詠まれた事情を述べる文章で、歌に先だつて置かれる。詞書で述べ足りぬことや、異伝などを歌の後に記したものが左註であるからして、左註は詞書の一部と見てよい。詞書は漢詩の題辞に倣つたものであるので、万葉集では漢文で書かれている。しかし記紀の歌謡から既に歌の詠まれた事情の説明があるから、歌を記録すると同時に詞書は発生していたわけである。

万葉集では「山上臣憶良在二大唐一時、憶二本郷作歌一」というふうに、いつどういう事情で誰が詠じたかを説明しているが、古今集以後は作者名は詞書中に書かず、別に記すようになつた。万葉集の詞書はおおむね簡単で、「詠レ雲」「寄レ物陳レ思」など題詞が多い。

平安時代に入つて仮名文が発達するにつれて、歌も詞書も仮名書きされて、両者は調和のとれたものとなつた。古今集は歌集の模範として、以後の撰集家集は詞書の形式をも踏襲した。後撰集の詞書は長く、物語に近

Osaka Shoin Women's University Repository

づいたが、拾遺集以後は古今集の様式に戻った。新古今集以後は短く、十三代集では題詞になってしまっている。

当時和歌は消息に欠くべからざるものであったので、古歌は詠歌の手本となり、秀歌は伝誦され、歌にまつわる話は歌語りとして語り伝えられた。仮名文の発達は物語文学への志向を高め、詞書は発展し、虚構を加え、伊勢物語のような歌物語を生み、家集は物語に近づき、歌物語りの採録は大和物語となったのである。

紫式部集もこうした機運のもとに生まれたものであり、既に彼女は源氏物語や紫式部日記を書いている。和文の名手である彼女の家集の詞書が秀れているのは当然であろう。紫式部集の歌と詞書は同じ程度に鑑賞すべきものと考える。私はこの家集の詞書を左の諸項につき述べたい。

1　紫式部集の詞書は一人称の立場、即ち自撰の立場の文章であること。
2　詞書の文体は簡潔な表現の中に、屈折の多い複雑な事情や心情を圧縮して表現していること。
3　詞書と和歌との照応が緊密であること。
4　歌絵・絵物語と歌との関聯について。

六

紫式部集は自撰の家集であることについて。詞書がどういう立場で書かれているかについては、阿部秋生氏に「勅撰和歌集の詞書の立場」（国文学35・10）の御高説があるが、私家集である紫式部集の詞書の立場は、

1　詞書が撰者の立場に立つものであるか
2　詞書が歌の作者の立場に立つものであるか

について考えよう。前者は三人称の文章となり、後者は一人称となる。家集の編集者と歌の作者が同一であれば一人称の文章となり、編集者が他人であるならば三人称の文章となる。紫式部集の詞書はどちらの立場に立つものであるかを見よう。

Osaka Shoin Women's University Repository

13　賀茂に詣でたるに、子規鳴かむ（なむ）という曙に、片岡の梢をかしう見えけり

24　水うみに、おいつ島といふすさきに向ひて、わらはべの浦といふ入り海の、をかしきを口ずさみに

48　世のはかなき事を歎く頃、陸奥に名ある所々、書いたるを見て

56　はじめて内わたりを見るにも、物のあはれなれば

77　都の方へとて帰る山越えけるに、呼坂といふなる所の、いとわりなきかけぢに、興もかきわづらふを、恐ろしと思うに

111　九月九日菊のわたをうへの御方より賜へるに

詞書には主語は書かれていないが、一人称の主語を省いたものである。歌の作者が賀茂に詣でたと自らの立場で述べ、片岡の梢を「をかし」と見たのである。類聚本の「子規鳴かむ」は、桂宮本では「鳴かなむ」と自らの願望を打ち出している。「をかし・あはれなり・恐ろし・あいなのおほやけごとどもや・うるさくて」など、主観的な心情表現を一人称で述べている。この集の詞書は大部分この立場から叙述されている。

但しわずかに三人称的な表現を用いた箇所もある。

40　こぞより薄鈍なる人に、女院かくれさせ給へる春、いたう霞みたる夕ぐれに、人のさしおかせたる

53　世を常無しなど思ふ人の、をさなき人のなやみけるに……

87　たまさかに返事したりける人、後にも又も書かざりけるに、をとこ

「こぞより薄鈍なる人」とは、宣孝卒去以来、喪に服し薄鈍の衣を着ていた紫式部を、才三者的に表現したもの。「世を常無しなど思ふ人」は作者自らであるのを、才三者的にいっている。87「返事したりける人」は作者。恋の歌のやりとりを、男、女という書き方をしたのは、この家集ではここ一箇所だけである。贈答の歌を、ある男がある女に贈るという形式、即ち詞書を記述者が、三人称の立場で書くのは、伊勢物語、大和物語、和泉式部日記、源氏物語など、物語を書く立場である。紫式部集中にこのような三人称表現の詞書が見られるのは、

Osaka Shoin Women's University Repository

上掲の3例と、41の詞書の4例に過ぎない。それは作者があらわに表現することを避けて才三者的にやわらげて表現したものであつて、才三者が書いた詞書ではない。

詞書中の敬語の用い方を見ると、宮仕以前には、敬語は全く用いられていない。作者につけられていないのは勿論のこと、二人称にも敬語がない。ところが宮仕以後は多くの敬語が見られるのである。

むかひたまへる人（大納言の君）ものし給ふ　おし下し給へり（小少将）殿御覧じて　折らせさせ給ひて　給はせたり（道長）宮の御うぶ屋　はじめたてまつり　ののしり給ふ　宣はすれば（仝）問ひ給へる　まゐらす宣へる（辨宰相）うへの御方より賜へるに　すまひ御覧ずる日等

作者の立場から、殿・中宮・若宮・殿の北の方などに最上の敬語を用い、上臈の女房にも敬語を使い、公的な交際が多くなつたことを示している。又自らにつける謙譲語の「侍り」が全く用いられていないのは、この家集が私のものとして、撰せられたものであつて撰集の資料などとして世に出すことを意識していないことを示している。

詞書の検討には、助動詞「き・けり」の用法が考えられているが、島田良二氏の「雅平本業平集の詞書の検討」（国語と国文学　35・7）のお説を摘記すると、

三代集では、古今集詞書は「き」5例。他はすべて「けり」。後撰集詞書は「き」はなく全部「けり」。拾遺集詞書は「き」1例で他は全部「けり」と、勅撰集の詞書はほとんど「けり」で占めている。私家集では自撰集と言われ、日記的性格を多少とも持つているもの、兼澄集　馬内侍集　元輔集　相模集　雅平本業平集　建礼門院右京大夫集　成尋阿闍梨母集などは「き」を主体として用いてあり、他撰といわれる敦忠集　公任集　本院侍従集　西本願寺本・東山御文庫本・前田家本業平集などは、「けり」を主体として用いて居る。伊勢物語　大和物語　平仲物語　篁日記なども「けり」が主体である。他撰といわれる貫之集　伊勢集　桧垣嫗集　遍照集などは、「き」「けり」を混用している。

ということであるが、紫式部集では詞書は「けり」が「き」よりも多く、歌では「き」が「けり」より多く、歌

Osaka Shoin Women's University Repository

と詞書を併せ考えれば、「き」「けり」は同数に近い。表示すれば、

作品	き	けり	比率	備考
紫式部集	詞書 10 歌 19 29	詞書 30 歌 5 35	き：けり 詞書 1：3 全体 1：1.2	類聚本による
紫式部日記	文・歌共 104	仝 79	き：けり 1：0.76	紫式部日記用語索引による
源氏物語	文・歌共 3099	仝 3648	き：けり 1：1.18	対校源氏物語用語索引による

「き」は話し手自身で体験した事実を回想する場合に用いられ、「けり」は確実でない過去の事実とか、自身で体験しない事実を回想する場合に用いられる。しかし必ずしもこの区別が截然と行われているわけでもなく、「き」の緊迫した断定的表現と、詠歎余情を含む「けり」とは筆者の好みや、その情況によつても異るので、「き」「けり」の数だけで自撰他撰を定めるわけにもいかない。しかし島田氏の御研究は傾聴すべきものと思う。この表を見て興味あることは、作者が自己の立場を以て一人称で記した紫式部日記は、「き」が主体となつて居り、物語という三人称の立場で記した源氏物語では、「けり」が主体となつている。自らの歌でも編纂者という客観的な意識の働いている家集では、「き」「けり」混用ながら、詞書では「けり」が大勢を占め、歌詞書

Osaka Shoin Women's University Repository

併せると、「き」「けり」の比率が物語に近似している。紫式部は三つの作品を通じて例えば「き」を主としても、「けり」が数例で他は「き」であるとか、又その逆であるとかいう偏向はない。作者の立場によつて「き」「けり」いずれかにウエイトを置きつつ、語のニュアンスを生かして常に両者を適度に混用しているのである。

七

詞書の文体を考察しよう。家集編纂に当つては、歌も詞書もかなりな補筆修正が行われているはずである。編纂の方針・配列・分類・体裁の統一・贈答の関係など、種々の考慮がなされて、加筆削除などの改変が行われたであろう。特に詞書は歌よりも大きく変わり、編纂時の文体を示していると思う。現存の紫式部集は誤脱の箇所もあり、編纂時の形態を完全に保つてはいないが、歌風や文体を知るには充分である。

家集は彼女の三つの作品中、最もおそいものであり、紫式部晩年の文体を示しているわけである。今日見られる他の私家集の詞書と比較すると、断然秀れていると思う。この詞書の文体は古今集の詞書よりも、伊勢物語の文体に近い。和歌を主に立てて簡潔に記してあるが単純でない。圧縮し屈折した文体から複雑な事柄や、細かな心情の動きが浮かび上つてきて、物語作者の冴えた筆致がうかがわれる。巻頭から巻末まで詞書の文体は洗練され無駄がなく、緊張し一貫したものがある。前半の詞書は、歌にふさわしいロマンの香りと花やかでみずみずしい詩情が流れ、後半は公的な儀礼的な文章で短くなつて居り、佗びしく沈んだ悲愁の感が深い。

15　姉なりし人なくなり、又人のおととうしなひたるが、かたみに行き逢ひて、なきがかはりに思ひかはさんといひけり。文の上に姉君と書き、中の君と書きかよはしけるが、おのがじし遠き所へ行き別るるに、よそながら別れ惜みて

39　遠き所へ行きにし人のなくなりにけるを、親はらからなどかへりきて、悲しき事いひたるに

77　都の方へとて帰る山越えけるに、呼坂をいふなる所の、いとわりなきかけぢに、興もかきわづらふを、恐ろしと思ふに、猿の木の葉の中より、いと多く出で来たれば、

Osaka Shoin Women's University Repository

8　遥かなる所に、行きやせん行かずやと、思ひわづらふ人の、山里より紅葉を折りておこせたる。

29　近江の守のむすめに、●(桂)懸想すときく人の、二心なしなど、常にいひ渡りければ、うるさくて、もとより人のむすめを得たる人なりけり。文ちらしけりと聞きて、ありし文ども取り集めておこせずば、返事書かじと、ことばにてのみいひやりければ、皆おこすとて、いみじく怨じたりければ、正月十日ばかりの事なり。けり(桂)

32　

102　む月の三か、内より出でて、古里のただしばしの程に、こよなう塵積り、荒れまさりにけるを、こと忌みもしあへず

121　小少将の君の書き給へる打解け文の、物のなかなるを見つけて、加賀少納言のもとに

面白い詞書は枚挙に遑がない。姉を失つた紫式部は、妹を亡くした人を姉君と呼び、その人も彼女を中の君と書いて文通していたが、親と共に筑紫へ下り、紫式部も越前に赴いた。交通不便な世にも二人は遥かな便りを交し合つた。筑紫の人は彼地に没し、紫式部は帰京後、そのことを聞き悼む歌を詠んだ。はかなく美しい純情物語である。数行の短い文章の中に娘達の友情、離別、死などが抒情豊かに叙述されている。77の詞書からは旅の情景や作者の心情がありありと浮かび上つてくる。「行きやせん行かずやと思ひわずらふ」のは、恋する者の心の襞をたたみこんだ表現である。32はこれ以上縮めることが出来ないまでに圧縮して、いり組んだ事情を述べ、双方の掛引きを読み取らせる。主語や補語を省略して、屈折しつつ文をつないで、息の長い一つのセンテンスに纒めている。高度の文章技倆を要する文体である。小少将を悼む3首は悲愁の感が深い。「打解け文の、物のなかなるを見つけて」の中に無量の感慨が込められて、余情深く家集を閉じている。

家集にも日記にもある歌の詞書が、日記の文章からどのように圧縮されているかを見よう。

Osaka Shoin Women's University Repository

家集

朝霧のをかしきほどに、おまへの花ども、色々に乱れたる中に、女郎花いと盛りなるを、殿御覧じて、一枝折らせ給ひて、几帳のかみより、これただにかへすなとて給はせたり。

73　女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそ知らるれ

と書きたるを、いと疾く

74　白露は分きても置かじ女郎花心からにや色のそむらん

日記

わたどのの戸ぐちのつぼねに見いだせば、ほのうちきりたるあしたのつゆもまだおちぬに、殿ありかせ給ひて、御随身召して、遣水はらはせ給ふ。橋の南なる女郎花の、いみじうさかりなるを、一枝折らせ給ひて、几帳のかみより、さしのぞかせ給へり。御さまの、いとはづかしげなるに、わが朝顔の思ひ知らるれば、「これおそくてはわろからん」と、のたまはするにことづけて硯のもとによりぬ。

女郎花さかりのいろを見るからに露のわきける身こそ知らるれ

「あなと」と、ほほゑみて硯召しいづ。

白露はわきても置かじ女郎花心からにや色のそむらむ

新古今集　巻十六　雑上

法成寺入道前太政大臣、女郎花ををりて、歌よむべきよし侍りければ　　紫式部

寛弘五年秋七月、中宮彰子はお産のために父道長の土御門邸に退出していられる。早朝秋草が咲き乱れる中を、道長は逍遥する。紫式部日記冒頭の流れるような名文も、歌の詞書にすればなお冗漫である。……ほどに……中に……なるを……御覧じて……給ひて……とて給はせたり。と一つのセンテンスに圧縮している。これ以上一語も省くことの出来ない珠玉の文章である。ところが新古今集の詞書になると、土御門殿の情景は消えてしま

Osaka Shoin Women's University Repository

う。紫式部集の歌は詞書ぐるみ鑑賞するところにおもしろみがあるのである。

次に詞書と歌との照応を見よう。

はやうより、童友だちなりし人に、年頃経て行きあひたるが、ほのかにて、十月十日の程、月にきほひて帰りにければ、

1　めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半の月影

その人、遠き所へ行くなりけり。秋の果つる日、きたる暁に、虫の声あはれなり。

2　鳴き弱るまがきの虫もとめがたき秋の別れや悲しかるらん

秋の果つる日とあるから、十月十日では遅過ぎる。桂宮本では「十月十日のほど」がない。新古今集の詞書は「七月十日のころ」としている。昔、幼馴染だった友に、久しぶりに解逅した。名残も尽きぬうちに友は帰ってしまった。折からの十日の宵月が、ほのかに雲隠れてしまったように……と名残惜しさの感懐を盛り上げて歌に入る。詞書と歌とが、互に映発し合って効果をあげている。その懐しい人は、会者定離の世の定めさながら遠国に旅立つというので、秋の尽日暇乞いに訪れた。一夜語り明した暁、鳴き弱った虫の声は一入哀れが身にしみる。景情一致してあわれ深い。文から歌へ、歌から文へと流れるように続く妙味は源氏物語には随所に見られる。

月は入りかたの、空清う澄みわたれるに、風いと涼しく吹きて、草むらの虫の声々、もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。

鈴虫のこゑのかぎりを尽くしてもながき夜あかずふるなみだかな　（桐壺）

この文と歌の照応の見事さ、続きの渾然とした美しさは、源氏物語に至って最高に達している。詞書と歌との照応、緊密な響き合いは此の家集の特色である。

八

最後に歌絵と物語絵の歌について記さねばならない。30は歌絵、48は名所絵、44 45 46 47は物語絵を詠んだ

Osaka Shoin Women's University Repository

ものであり、94には歌語りが見える。

歌絵に、あまの塩やくかたをかきて、こり積みたるなげきのものに、書きて返しやる

30　四方の海に塩焼くあまの心から焼くとはかかる歎きをやつむ

30の歌絵は吉沢義則博士の『源語釈泉』に述べて居られるように、「書き載せる歌意を表わした装飾絵であつて、歌を書く為の下絵」と解しておく。歌が先にあつてそのこころを絵にあらわす場合と、絵があつてその情景にふさわしい歌を書きこむ場合とあるわけである。詞書によると紫式部が海士の塩焼くさまを歌絵にかいて、積んだ投木（薪）のもとに歌を書きつけたものを返歌としたことになる。桂宮本の異本に「返し」がないのがあるが、続千載集巻十七　雑中には、「歌絵に海士の汐やく所にこりつみたる木のもとにかきて人の許に遣しける」とある。彼女に絵心のあることは、雨夜の品定めや須磨の絵日記のくだりにも窺えることで、恋の贈答にも用いたであろう。歌絵は絵と歌と筆跡とを綜合的に鑑賞したもので当時盛に行われていたことは、歌合や中務集・源重之集・栄華物語・大鏡などに見えている。また中宮彰子入内の際の調度に、「御厨子など御覧ずるに……弘高が歌絵書きたる冊子に、行成の君の歌書きたるなど」（栄花物語　耀く藤壺）と素晴しい歌絵の冊子あつたことがわかる。

絵に物怪つきたる女の、みなむきかたかきたる後に、鬼に成りたるもとの女を、小法師のしばりたるかた書きて、をとこは経読みて、物怪せめたる所を見て（桂）

44　なき人にかごとをかけてわづらふも己が心の鬼にやはあらん

返　し

45　ことわりや君が心の闇なれば鬼のかげとはしるく見ゆらん

絵に、梅の花見るとて、女のつま戸押し開けて、二三人居たるに、みな人々寝たるけしき書いたるに、いとさだすぎたる男の、をもとの（桂）面杖ついて、眺めたるかたある所（桂）

46　春の夜のやみのまよひに色ならぬ心に花の香をぞしめつる

Osaka Shoin Women's University Repository

同じ絵に、嵯峨野に花見る女車あり。なれたる童の、萩の花に立ち寄りて、折り取る所

47　さを鹿のしかならはせる萩なれや立ちよるからにおのれ折れ臥す

世のはかなき事を歎く頃、陸奥に名ある所々、書いたるを見て、塩がまの浦●(桂)

48　見し人のけぶりとなりし夕より名もむつまじき塩がまの浦

44 45 46 47 は歌絵でなく、物語のある場面を絵にしたものであろう。この家集に屏風の歌は見えないが、当時屏風の絵（風景　名所　風俗等）を詠んだ歌を書き、絵と歌とを共に鑑賞したことから、手軽な小品の紙絵が盛んになり、物語を絵に表わし、また画中の人物の心になつて歌を詠じた。それは物語を享受しつつ創作することである。44から48までは家集の配列上からは、宣孝没後幾許もない頃であり、彼女は悲しみの衝撃が落着くにつれ、空虚なつれづれを慰めるべく、最も熱心に物語を読み、また創作をしていた頃となるのである。これらの歌を見ると、絵の読みが深いことを感じる。一枚の絵に無限の広がりを想像し、作中の人物と一体となつて詠じている。物語の愛好者たちは、しばしば絵を見て、歌を読み返歌し物語を継いで行つたのであろう。さればこそ源氏物語中の794首の歌が、登場人物それ〴〵の心境になつて、生き生きと詠みわけられたのである。

44の詞書の「みなむきかた」は解し難い。桂宮本・御所本の「みにくきかた」を取ろう。南波浩氏も瑞光寺本紫式部集によつてこのことを述べられた。僅か二行ばかりの詞書で、物語の筋の一部を述べ得ている。物怪が憑いて錯乱状態になつた女（よりまし）の後に、物怪となつたもとの女（男のもとの情人）を、小法師が縛つている。男は経を読んで物怪を調伏しようとしている情景を描いた絵であろう。罪深いのは男、死して鬼になつた女こそ憐れである。

物怪のせいにして悩んでいるが、物怪は男の良心の影であろうと、批判的に詠じたのを、それに和して返歌をしているのは、彼女と共に物語絵を見ている女性であろう。46の絵は44と同じ物語絵の他の場面であろうか。「心の鬼—心の闇—鬼の影—闇のまよひ」脈絡があるようである。47は46と同じ絵とある。同じ絵物語の他の場面とすると、44から47までは一連の物語絵ということになる。46の詞書の、「いとさだすぎたる男」は桂宮本・

Osaka Shoin Women's University Repository

御所本「おもと」とある。女ばかりの場に男が居るのも不似合いで、「いとさだすぎたる男」では詩情に乏しい。「おもと」は女房の尊称で、若かりし頃の色ごとも昔の夢と消えて、今は色ならぬ心に梅の香をめでているのではないか。おもとの心境になつて詠じている。

47は秋草の咲き乱れる嵯峨野に花見る女車。車の主の姿は見えない。召使の女の童が萩の花を折り取る。絵を見ただけで「なれたる童」と解されるのは、物語の内容からであろう。歌の「しかならはせる萩なれや」に照応する。萩はおのれと折れ臥す。「なれたる童」の風情であり、車の主をも暗示する。艶な気分が漂つて詞書は深い含蓄を持つている。玉葉集　巻四　秋上に「屏風の絵に花見る女車あり、わらはの立ちよりて萩の花折る所」とあるのは単純な説明に過ぎない。

48は名所絵で屏風に書かれたものかも知れない。亡き夫を偲ぶ真情が静かに流れている。夕顔の巻の「見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつまじきかな」のもとになつた歌であろうが家集の歌の方が遥かによい。

煩ふことある頃なりけり。かひぬまの池といふ所なんある。人のあやしき歌語りするを聞きて、試みに詠まんといふ。

94　世にふるになぞかひぬまのいけらじと思ひぞしづむ底は知らねど

又心地よげにいひなさんとて

95　心ゆく水のけしきはけふぞ見るこや世に経つるかひぬまの池

貝沼の池はどこにあつたのか、悲しい伝説が語り伝えられていたのか、人が怪しい歌語りをしているのを聞いて、自分にも煩悶のある頃、歌語りの主人公のつもりで試みに詠もうという。生きる望を失つて池の底に沈もうといい、思い返して「生けるかひあり」と詠む。こうした試みが、物語の中に歌を詠み入れる修練となり、歌語りは物語創作の素材となつた。源氏物語は多くの昔物語りや歌語りを吸収し、漢籍仏典を駆使消化して、紫式部の抱懐する人生観や人間観を、具体的な人間模様をもつて描き出したものである。

以上紫式部集の歌と詞書を眺めて来たが、彼女が自らの生涯の心の記録として纒めた家集こそ、源氏物語や紫

Osaka Shoin Women's University Repository

式部日記共々、更に多くの人に読まるべき価値あるものと思う次才である。

（1967・8・10）

〔注1〕 遺著『紫式部日記』所収　紫式部家集
〔注2〕 『源氏物語の基礎的研究』所収　紫式部集の本文の成立とその文芸的価値
〔注3〕 紫式部集の復元とその恋愛歌　文学40・2
〔注4〕 紫式部集における恋の歌の姿勢　女子大国文　38・6
〔注5〕 角田文衛氏著『紫式部とその時代』所収　越路の紫式部
岡一男博士は長徳四年春帰京説